

フィチーノ『神的狂気について』(1457年) 翻訳と註解

田 中 佳 佑

拙稿は、フィレンツェ・プラトニズムを代表する哲学者マルシーリオ・フィチーノ(Marsilio Ficino, 1433-99)の手による1457年12月1日付ペレグリーノ・デリ・アリ宛書簡の全訳である。同書簡は、『神的狂気について(De divino furore)』の通称で知られるとおり、プラトーンが『パイドロス』や『イオン』などの対話篇で論じていた「神的狂気(theia mania)」の主題について、少壮気鋭のフィチーノが見解を陳べたものである。

西欧美学史上、古代ギリシアにおいて劇詩が神々への奉納物であった事情から、「神的狂気」ないし「入神(enthusiasmos)」は詩の制作原理の一つに数えられ、やがて批評の基準にも用いられるようになった。優れた詩は神がかりの境地で朗誦されると考えられたのである。この概念がとりわけて大きな影響を及ぼしたのは、18世紀以降の天才論、特にロマン派のそれであった。しかしそのような歴史事情を反映してか、従来の研究動向もまた、プラトーンの狂気論やロマン派の天才論、またシャフツベリー伯のenthusiasm論などについての考察に集中している観があり、古代と近代とを橋渡ししているはずのルネサンス期には、寄せられるべき関心がさほど寄せられてこなかった。かかる美学史研究上の不足を補うために史料を提示することが、このささやかな試みの目的である。

翻訳の底本には、Sebastiano Gentile (ed.), *Marsilii Ficini Florentini epistolarum familiarum liber I*, Firenze: Olschki, 1990, pp. 19-28を用いた。同書は現在のところ最も支持されているフィチーノ書簡集の校訂版である。段落の分け方はもとより、丸括弧やダッシュの使い方も全て底本に従う。ただしブラケットは田中による補説で、底本には無い。

『神的狂気について』（1457年12月1日付書簡）全訳

マルシーリオ・フィチーノより、ペレグリーノ・デリ・アリ様（1）へ ご機嫌よう。

11月29日、小生の父である医師フィチーノ（2）は、小生を宛名とする二通の貴翰をフィリーネにて渡してくれました。そのうち一通は自由な〔決まった論題のない〕弁論（3）について書かれたものであり、もう一通は詩についてのものです。実に、それらを拝読しながら、成長しつつある人を輩出し、その人の評判と名声によって顕彰されることができるゆえに、われわれの生きるこの時代を、小生はまったく祝福する結果となりました。小生としては、親愛なるわがペレグリーノよ、貴殿の生涯の時を小生も分かち持ちたく思いますし、貴殿のもとから日々去り逝くそれらの時を、小生は注視しています。小生は友の有する多くの美点に対して、喜びを感じるだけでなく、まことに、心から讃嘆してもいるのです。そしてまた、小生は若い人々を軽蔑しているにも拘らず、その記憶をわれわれが称えるあの先人たちの中からも、今まさに貴殿がすごされている御年齢において何事かを偉大に成し遂げた人を、小生は一人も思い出せません。このこと〔ペレグリーノの早熟な文才〕を、実に小生は、技芸や熱意のみならず、それらよりもなお一層かの神的狂気のゆえであると愚考します。この神的狂気を欠いて偉大な人物（4）たり得るとは、デーモクリトスもプラトーンも決して認めておりません（5）。こうして小生が申し上げて参ったとおり、貴殿が吹き込まれ、内的に捉われておいでの神的狂気によって、或る種の感激と燃え立つ情動が、貴殿のお書きになったものを〔潜在的着想の状態から著作という外形へと〕表し出し、〔神的狂気の〕証拠たり得ています。そしてまた、外に現れた動きとなるこの感激こそ、われわれの魂に宿る力が神的な力であることの最も有力な証拠であると古代の哲学者たちは主張したのでした。

しかし、狂気についてのわれわれの仕事〔研究〕は粗略な言及である〔にすぎない〕ため、この事柄に関するわれらがプラトーンの見解を、少しく、この短い手紙によって試みられる程度に、再確認したく思います。そうすれば貴殿は、狂気とは何であるか、狂気は幾つの部分に分けられるか、どの神がそれぞれの狂気〔の部分〕を宰領するかといったこ

とを、容易に知解なさるでしょう。それはまことに、貴殿にとって喜びでもあろうし、有益でもあろうと小生は確信しています。

さてプラトーンは　ピュータゴラスやエンペドクレース、ヘーラクレイトスも既に論じていたとおり（６）　、われわれの魂が、肉体の中へ滑り落ちてくる以前には天の玉座に高く留まっていたのであり、ソクラテースが『パイドロス』の中で言うように、かしこで「真理の観照によって養われ、観照を楽しんでいたのだ」（７）と推定しています。小生が先立つ箇所ですくしく触れておいた哲学者たちは皆、神が或る究極の始源であることや、また神が光　　その中で、哲学者たちがイデアーと名付ける万物の範型（８）が輝き始めるのです　であることを、全エジプト人のうちで最も智慧あるメルクリウス・トリスメギストゥス [ヘルメース・トリスメギストゥスに同じ] から学んだのでした（９）。そして哲学者たちは、魂が神の永遠の知性 [mens] を絶え間なく観照しており、万物の本性を明晰に直観しているに違いないと考えました。「それゆえ魂は」とプラトーンは言います、「正義そのものを見ていた。智慧そのものを、調和そのものを見ていた」と（１０）。そして魂は神的本性の或る驚嘆すべき美を見ていたと言うのです。さらに、神の永遠の知性の中に在るそれら全てを、プラトーンはイデアーとも、神的本質とも、第一本性とも名付けます。プラトーンによれば、人々の知性がかしこで暮らす間は、イデアー等の或る完全な認識によって、幸福に養われると言います。しかし、地上の事物への関心と欲望のゆえに魂たちが肉体へと引き降ろされるとき、以前には神の完璧な認識と喜びであるところのアンブロシア 神 饌とネクタル 神酒によって養われていた魂たちは（１１）、その墜落過程において、諸々の神的事柄 [イデアー] の忘却であるところのレテー 忘却川の水を、すぐさま飲み干すのだと言われています（１２）。そして地上的関心の考量のために墜落してしまったなら、以前の天へと飛び帰りはしません。かつては有していたが今は忘却している、かの神的本性を再考し始めるまでは。しかしこのこと [天へと帰るための再考] を、あの神の如きわれらの哲学者は、二つの徳によって達せられると考えます。その一方は、容易に分かるとおり、習慣に順うもの。他方は、もう一方を凌駕し、観照によって到達するもの。小生が既に強調しておいたことですが、プラトーンはそれらのうち前者を正義という呼び名で、後者をまさしく智慧という呼び名で名付けます。「それゆえこの両翼によって」とプラトーン

ンは言うのです。「(私見 [フィチーノの意見] によれば、これらの徳を確かに知解している) 魂たちは、天へと飛翔する」(13)。そして、哲学の二つの部分、すなわち周知のとおり実践的部分と観照的部分とによって、これらの徳を達成すると言います。われらのソークラテースが『パイドーン』の中で審議しているのと同様に(14)。それゆえ同じソークラテースその人が『パイドロス』の中でも、「唯だ哲学者の知性のみが翼を取り戻す」と言っています(15)。しかしまた一方では(16)、かの両翼の回復においてこそ魂は肉体から引き出されて行き、そして神によって満たされた魂は天へと牽引され、熱狂的に奮起するのだとも言います。

まさしくこのようにして、プラトーンは[肉体からの魂の] 離脱と奮起とを神的狂気と呼び、それを四つの部分に分けます。しかしまた、神的事柄の或る影のようなものや、肉体の感覚で捉えられる似像によって目覚めさせられなければ、人々が神的事柄を思い出すことは決してないともプラトーンは考えます。それゆえ、キリスト教徒の神学者のうちで最も智慧あるパウロと[偽] デオニューシオス(17)も、それぞれが見分けられる[感覚的に識別される] 出来事であるそれらのもの[影と似像] を通じて、神の不可視性が知解されると言明したのでした(18)。まさしく、人間の智慧は神的智慧の似像であるとプラトーンは主張するのです。同様に、われわれが声と楽器によって形作るあの調和そのものが神的調和の似像であるとプラトーンは見積り、人体の諸部分と四肢とのこの上なく適した配置から成る適合美[*convenientia*] と魅力とが確かに神的美的の似像であるとも見積ります。しかしながら智慧は、まったく誰にも、或いはごく僅かの人々にしか臨んでおらず、しかもいかなる肉体の感覚によっても捉えられないので、神的智慧の似像はわれわれにおいてごく僅かだけ在るように、しかもそれら似像は確かにわれわれの感覚に対しては秘密に、直接には知られぬようになされています。それゆえソークラテースは『パイドロス』の中で、「智慧の似像が目によって見分けられることは全く不可能だ」と言うのです。「なぜなら、もしも神的智慧の似像なるものを驚嘆すべき愛が見分けさせられるなら、それはあまりにも劇烈すぎるから」(19)。しかし、まさしく神的美的の似像ならば、目でも見分けられます。神的調和の似像ならば、耳で観察できます。目と耳を、プラトーンは、肉体を通じてはたらく全ての感官のう

ちで最も澄明なものと考えてのです。それゆえ、肉体〔物体〕に属している或る似像のようなものを、魂の中に、肉体の感覚を通じて引き取ることによって、かつて肉体という牢獄の外に置かれていたとき知っていたあれらの事柄を、われわれは或る程度まで思い出すようになります。まさしくその追憶により、魂は、既に奮い立っている両翼を燃え輝かせ、肉体の接触と穢れから自分を段々と清めてゆき、神的狂気によって真直ぐに動かされるのです。

それから、つい先ほど小生が言及しておいたあの二つの感覚によって、対を成す狂気の種〔二種の狂気〕が目覚めさせられます。そして確かに、美の種〔に属する狂気〕によって、目が正しく〔眼前に〕繰り広げるものを、われわれが現に取り戻しつつある可知的な美の或る追憶のようなものを、筆舌に尽し難いその追憶を、われわれは秘密裡に、知性の熱狂の裡に、切望しています。要するにプラトーンは、これを神的恋慕と呼び、似像の肉体を見ることによる結果としての、神的美を觀照することへの回帰の切望と規定しているのです。さらに、そのように動かされる人は、かの至高の美を切望するだけでなく、目でもって見開かれる眺めによって非常に楽しまされることが必要不可欠です。上述の如く、まさに何かを欲する人が、その欲するものそれぞれの似像によって楽しまされるように、自然は組み立てられています。

しかしプラトーンは、もしも人が実際にかの美の影のみを切望するにすぎず、目でもって見られたその現れを超えて更にもう一つのもの〔美のイデアー〕を賞讃しないならば、これを、愚鈍な性質と頹廢した本性との所産であると考えます。確かにプラトーンは、そのような人が、氣まぐれと淫らさの同類であるような愛〔肉欲〕によって動かされていると主張するのです。〔肉欲としての〕愛を、肉体の外形をめぐって感覚によって捉えられる、不合理で異常な快の欲求と規定しているのですから。そしてこの愛を、自分の肉体において或る程度は死に、相手の肉体において生きている、魂の炎熱と規定します。「それゆえ愛している人の魂は」とプラトーンは言うのです、「相手の肉体において〔自分の〕生を指導する」(20)と。この規定を学ぶエピクローソス派の徒らは、愛を、そこから美の似像が吸収されたところの相手の内部に注がれるべき、原子(それらのことをアトムと彼らは呼びます)の或る労役そのものと規定します(21)。このようにわれらのプラトーンは、愛は人間の病か

ら生れると言ひ、憂慮と心配に満ちていると言ひます。また愛は、その知性がすっかり闇に覆われている者同士を結合させると言ひます。それゆへプラトーンは、愛が高貴でもなければ、他の全てのものに比して卓れてもおらず、はかなく脆いこの原子の似像を超えることもないと考えのです。「闇の牢獄と翳の檻倉」(22)においては、人は光を見ません。これに対し、その性質が肉体の泥から引き出された、そのように完成された人々に向かって誰かの肉体の外形[の眺め]と魅力が投げかけられるときは、先ずかの神的な美の似像を見ることによって歎ばされるのは当然ながら、また同時に、この似像によって直ちに記憶の中へ神的な美を蘇らせ、何よりもその美を称え、正しく切望し、[完成された人なら]誰もが、この上なく熱烈な切望によって星々の高みへと運び去られるのです。そして第一に、この飛翔する神적奮起を、プラトーンは離脱とも狂気とも呼びます。

目を通じて起されるこの狂気について、われわれは十分に論じたと思われ(23)。一方でまた、魂は耳を通じて或る和音[concentus]とこの上なく甘美なりズム[numerus]とを受け取ります。そしてこれらの似像によって[調和のイデアーを]思い出させられ、より鋭い知性の内奥の或る感覚によって看取されるべき神적音楽に向かって、目覚めさせられるのです。

しかしプラトーン派の解釈者らの間で、神적音楽は二重です[二通りに理解されます]。一方では、[神적音楽は]まさしく永遠なる神の知性において存立すると彼らは考えます。対してもう一方では、諸天球や円環軌道が或る驚嘆すべき和音を作り出す天体の秩序と運動において存立すると考えます。しかしながら両者ともに、肉体によって調律を乱される以前のわれわれの魂が[神적音楽の]一部に由来すると考える[点では一致しています]。まさしく[肉体という]この闇の中で、魂は耳を、或る裂け目として、また[天からの]使者として用います。そして耳によって、既にわれわれが幾度となく論じてきたように、比類を絶するかの音楽の似像を受け取ります。耳によって、かつて楽しんでいた調和の、或る内奥のえも言われぬ追憶へと導かれます。そして全ての人々は切望によって燃え立ち、真の音楽を再び楽しむように、[天における]各自本来の座へと飛び帰ることを希むのです。肉体の闇という閉じられた場所にいる間はそれが全く達成できないということを魂が知解してい

るときは常に、その人が幽閉によって楽しめないでいる神的音楽を、何としても、持てる力に応じて、模倣することに努めます。

しかしこの模倣は人々の間で二重です〔二通りに実践されます〕。或る人々はまさしく声のリズムと様々な楽器の音によって天上の音楽を模倣しますが、まことに軽薄でほとんど俗衆のとも言うべきその人々のことを、われわれは伶人(24)と呼びます。これに対し、より荘重で、より力強い人々は、或る判断によって神的な天上の調和を模倣しつつ、内奥の計算感覚(25)と探究とを、詩行の脚韻とリズムに向けて割り当てます(26)。実に、神霊を吹き込まれたこれらの人々は、或るこの上なく荘重でこの上なく煥綺な詩歌を希求すると彼ら自身で言っており、よどみなく、直截に、〔そのような詩歌を〕ほとぼしらせませす。

この、より荘重な音楽および詩を、プラトーンは最も力強い模倣と名付けます。しかしわれわれが先にその卑小さについて注意を促したあの軽薄なほうの音楽は、たんに声の甘美さによって〔聴く者を〕撫でるにすぎません。一方、神的調和に固有のものたる詩は、燃え立ちながら、声と動きのリズムによって、詩人〔オルペウス?〕が言ったように、或る最も荘重なデルポイの〔神託の〕意味するところを表し出すのです(27)。これにより、耳を慰めるだけでなく、天上の神饌に似た最も甘美な滋養物を知性にもたらしようになります。そしてそのおかげで、神性の近くまで達するのだと思われます。まさしくこの詩的狂気はムーサイ〔九柱で一組のムーサたち〕によって生起するとプラトーンは見積ります。その一方「ムーサイの鼓舞もなく詩に入門する人が、或る技芸のようなものによって良い詩人になるだろうと信じるなら、その人自身もその人の詩も実に空疎である」とプラトーンは評価します(28)。また、天上的な入神と力によって堅く捉われたかの詩人たちは、幾度となくムーサイから吹き込まれて神意を明らかにしますが、憑かれていた狂気を失くした後では、まさにその詩人たち自身でさえ、自分がもたらしたもの〔詩〕をさほど知解できなくなるとも評します。そして私見によれば、あの神のような人物〔プラトーン〕はムーサイが天上の詩歌として知解されると主張したのです。したがってまた、ムーサイは詩歌に由来して旋律とも詩神とも呼ばれたのだと一般に言われています。それゆえ天上の神々でもあり詩歌でもあるムーサイによって、神のような人間たちは詩の旋法とリズムを考察し、ムーサイの模倣へと奮起させられるのだ

と言われます。そしてまたプラトーンは、『国家』の中で天球の回転運動について論じているので、それぞれのセイレーンたちが天球の運動を表しながら各々の円環軌道に坐していると言います(29)。それゆえ或るプラトーン派の徒は、ギリシア語で「セイレーン」が神によって歌うことをまさしく意味するゆえに、詩歌は神々によってもたらされると言うのです(30)。往古の神学者たちもまた、九柱のムーサイが、八つの天球の詩歌の歌い手と、かの女たち全員から成る最大の一つもの、すなわち調和であると主張していました。それゆえ上の理由により、詩は神的狂気から、狂気はムーサイから、ムーサイはまさしくユーッピテル[ゼウスに同じ]から起っているのです。と言うのも、世界靈魂のことを、プラトーン派の徒らはしばしば「ユーッピテル」と呼ぶからです。ユーッピテルは

あめつちと たぎち流るゝ海原を
耀ふ玉なす月かげと ティーターニアの星々を
全てを内に養ひて 五體をめぐり注ぎつゝ
重りかにして大きなる 己が肉身にくみを動かしたり(31)

その結果、全世界の靈にして知性なるユーッピテルによって天球が動かされ導かれることになり、同じくユーッピテルから、人々がムーサイと呼ぶ歌い手たちも生起します。それゆえ輝かしきこと最たるあのプラトーン派の徒は[こう歌っています]、

ユーッピテルより始めよムーサイ、ユーッピテルは萬象に遍満し(32)
云々

なぜならユーッピテルと呼ばれるあの魂[世界靈魂]は、何処においても遍在し、万象を満たしているからです。そしてピユータゴラス派の徒であるミーレートスのアレクサンドロス(33)が言うように、ユーッピテルは天を或る豎琴のようなものとして奏でつつ、天上の調和を作り出すからです。そしてまた教祖オルベウスも、かの神「ユーッピテルは最初のものなり」と言います、「ユーッピテルは最後のものなり、ユーッピテルは頭領なり、ユーッピテルは中庸なり、ものみなユーッピ

テルより生れて在り、ユーッピテルは地の礎にして天の星明かり、ユーッピテルは手力男に権現し給ひ、ユーッピテルは不滅の嫁御、ユーッピテルは萬象の靈にしてうつし身、ユーッピテルはわたつうみの根源、ユーッピテルは尽きせぬほむらの焚き荒み、ユーッピテルは太陽にして月、ユーッピテルは萬象の王にして元首、萬象を覆ふ光を、沈思せる慈悲の御心より再び投げかけ給ふ」(34)。これらの引用から、ユーッピテルが[自身から]流出した全ての物体を保持し養うということが知解されます。まったく正当にも

ユーッピテルとは汝が見る全てのもの、汝が動かしたる全てのもの(35)

という文句があるように。

以上の後に、残りの神的狂気の種が弁別されます。それらは二つに分かれるのであり、一方は密儀をめぐって指定され、予言と呼ばれるもう一方は未来の出来事をめぐって指定されるとプラトーンは考えます。まさしく前者の狂気は、神々の尊崇、宗教、聖なる贖罪、遂行されるべき儀式などに服する人々における、魂の熱烈な激情であるとプラトーンは定義します。ただし、その種の狂気を模倣する偽りであるところの知性の動きは、迷信と名付けます。それに対して後者の狂気の本性は、予言を宣することにおいて、神から吹き込まれる入神的予知以外の何ものでもないとしてプラトーンは考えます。そしてこれを、われわれは特に「神託」とか「予言」といった名称で名付けているのです。肉体から引き出された知性が神がかりによって揺り動かされるゆえに、魂がこの神託というものにおいて烈しく燃え立つならば、そのことをプラトーンは狂気と呼びます。ただし、もしも人が[神的狂気というよりは]むしろ人間的な技能や神与[生来]の鋭敏さによって未来の事どもを予見するならば、その種の予知のことは、先見の明とか深謀遠慮とか呼ぶべきものであるとプラトーンは見積ります。

以上の全てから、四つの神的狂気の種が恋慕、詩歌、密儀、予言であることは今や明らかです。神的恋慕を、あの俗衆的で深く常軌を逸したもう一つの愛[肉欲]が誤って模倣し(36)、詩歌を(われわれが既に論じたように)軽薄なほうの音楽が誤って模倣し、密儀を迷信が誤って模倣し、神託を深謀遠慮が誤って模倣します。確かにプラトーンの著作

の中でソークラテースは、第一の狂気〔恋慕〕をウェヌスに、第二〔詩歌〕をムーサイに、第三〔密儀〕をディオニューソスに、第四〔予言〕をアポローンに配しています（37）。

それにも拘らず小生は、神的恋慕と神的詩歌へと向う狂気について〔他の二つの狂気よりも〕長く書くことを、二つの理由から選びました。その理由とは、容易にお分かりになるとおり、〔恋慕と詩歌という〕二つの狂気によって貴殿が熱烈に動かされておいでであることを小生が存じ上げていたためと、もう一つは、貴殿によって書かれたものが、貴殿のご創作からではなくユーピテルとムーサイからもたらされたものであることを、貴殿がお覚えおき下さるためです。その神々の霊と神性によって貴殿は完成されるでしょう。それ故おお我がペレグリーノよ、貴殿がこれまでもそうなさってこられたと小生が堅く信じているとおり、最大にして最善の作者と着想源は、貴殿でもなければ全く他の誰でもなく、不滅の神であるということをお学ばれるなら、貴殿は正しく敬虔に著作なさるでしょう。

さようなら、お元気で。小生にとっては貴殿にも増して親しい人はいないということをお、貴殿ご自身に説き聴かせて下さい。

フィリーネにて 1457年12月1日

・ 註解

1) ペレグリーノ・デリ・アリ (Peregrino degli Agli, 1440-c.64) はフィレンツェの少年詩人。ヤーコボの子。15歳のときに書いた詩が一躍文人の間で賞讃の的となり、神童の名を恣にする。伝ホメロス『蛙鼠合戦物語』のラテン語訳を試みたともいう。ウゴリーノ・ヴェリノ (Ugolino Verino, 1438-1516) の『華都の誉れ (De gloria urbis Florentinae, 1487)』第 巻にも、この少年の記事がある。窮乏のうちに夭折したが、フィチーノからその文才を愛された。なお、のちのフィエゾーレ司教でカレッジの文人仲間にも名を連ねていたアントーニオ・デリ・アリ (Antonio degli Agli, 1400-77) とは、直接の関係は無いようである。この手紙が書かれたときペレグリーノは17歳、フィチーノは24歳。

2) ディオティフェチ・ダンジェロ (Diotifeci d'Angelo, 1402-79) の

こと。メディチ家に侍医として仕え、「医師フィチーノ」の通称で知られる。フィレンツェ南東郊外フィリーネの出身であり、終生そこに居を構えていた。本文に「フィリーネにて」とあるのは、マルシーリオの実家を指す。

- 3) 古代から中世を通じてルネサンス期に至るまで、弁論には幾つか定まった伝統的な論題があった。例えば追悼、弁護、賞讃、弾劾、眼前にある物の描写などが、科目として教育された。ここにある「自由な弁論 (*soluta oratio*)」とは、それら伝統的論題のいずれにも属さぬ、任意の題についての弁論の意。漫談やお喋りの類ではない。
- 4) 「人物」と訳したこの ‘*vir*’ は、職業詩人に限らず人間一般を指すと考えてよいというのが田中の解釈である。その解釈の根拠について拙稿では紙数の制約から論じられぬため、別の機会に論証することをここに予告しておく。本質的問題とは関係のない蛇足ながら、‘*vir*’ を「成人男性」ではなく敢えて「人物・人間」と訳す理由を断っておくが、古代ギリシア以来、西欧の伝統的常識によれば、「人間」のうち成人女性 (*femina/vira*) と未成年者 (*infans*) はふつう含まれなかったからである。
- 5) デーモクリトス断片 DK18, 「そしてデーモクリトスも [プラトーン『イオン』534B と] 同様に言っている、『対して詩人は、入神と神霊との助けによって何事かを書いてこそ、まことによき者であり得るに違いない』(*kai ho Dêmokritos homoiôs [wie Plato Ion 534 B] poiêtês de hassa men an graphêi met' enthûsiasmû kai hierû pneumatos, kala karta estin...*)」(アレクサンドレイアのクレメーンス『雑録』 . 168) など。ここのブラケットに限りディールスによる補い。以下、註に引く典拠の翻訳は、聖書を除き、拙訳による；プラトーン『パイドロス』245A5-8, 「だが、もしも人が、技芸によって良い詩人になるだろうと信じて、ムーサイの狂気もなく詩に入門するならば、その人は空疎な詩人となり、またその人の正気の詩も、狂気の詩のもとでは消されてしまう (*hos d'an aneu manias Mûsôn epî poiêtikas thyras aphikêtai, peistheis hôs ara ek technês hikanos poiêtês esomenos, atelês autos te kai hê poiêsis hypo tês tôn mainomenôn hê tû sôphronûntos êphanisthê*)」。この箇所をフィチーノは後に引用する(註28参照)。

- 6) ピュータゴラス自身の言葉は伝存しないが、イアンブリコス『ピュータゴラスの生涯』ほか、この哲人が魂の輪廻転生を説いていたことは諸書に散見される；ヘーラクレイトス断片 DK77, 「それゆえヘーラクレイトスも『魂にとっては湿ったものに生れることが享樂でもあり死でもある』と言った。なぜなら、まさしく享樂とは、誕生へと落ち込むことであるから[・・・](*hothen kai Herakleiton psychêisi phanai terpsin ê thanaton hydrêisi genesthai. terpsin de einai autais tèn eis genesin ptôsin...*)」(ポルピュリオス『ニュンフの洞窟』x)；エンペドクレス断片 DK121, 「[・・・]かの者[魂]は翼がもげた衝撃で[天を]離れ去り、土くれの肉体の中へと落ちてきた。幸福な生を奪われて(...*hon apolipôn tēi hormēi tēs pterorryêsēs eis gêinon erchetai sōma olbiū aiōnos amertheis*)」(ヒエロクレース『「黄金の歌」註解』xxiv)。
- 7) 『パイドロス』247D3-4, 「諸々の真理を見て取ることに満足し、養われ、歓びを感じる(...*agapai te kai theōrūsa talêthē trephetai kai eupatheî...*)」。
- 8) 「範型」と訳した原語は 'exemplarium' である。これは、キケローがプラトーン『ティーマイオス』をラテン語訳した際、'paradeigma'の訳語として採用した語。範型が光のうちに在るという説をフィチーノは後の『饗宴註解 (*Commentarium in Convivium Platonis*, 1469)』 . xiii でも繰り返すが、そこでは、範型(真実在)を包含する神の光が人間の知性にも魂の光として注がれるため、人間は自己の内なる光を探究すれば真実在を認識できるという、真理の根拠の説明へと深化している。そしてフィチーノによるこのような光の意義付けが、パトリーツィやチャーベリーのハーバート卿に継承され、やがてケンブリッジ・プラトーン学派の認識論にも影響を与えることになる。
- 9) ヘルメース・トリスメギストスとは、エジプト神話のトート神と、ギリシア神話のヘルメース神との習合 (syncretism) によって生じた神であり、耕作や文字を発明して人類に智慧を授け、文明の基礎を築かせたとされている。また錬金術でも、水銀(ヘルメース)と硫黄との化合が重視されることから、ヘルメース・トリスメギストス崇拝が行われた。中世に広く流布していた伝説によれば、この神

はエメラルドの板に智慧の奥義を書き記し、後世に伝えたという。この『碧玉文書』の存在を信じる人々は、古代のあらゆる哲学者がこの文書を通じて智慧を学んだと考えた。特に、ピユータゴラスが若い頃エジプトの神官のもとで修行したという伝説や、プラトーンが同じくエジプトに留学したという伝説が広く知られていたため、彼らをヘルメース・トリスメギストスの弟子と見なし、ヘルメースの学統なるものを信じる「ヘルメティズム」が、ヘレニズム期から思想界に出現した。やがて、ヘルメース・トリスメギストスに仮託して書かれた一群の『ヘルメース文書』も現れ、上述した伝説の『碧玉文書』と混同されながら、流布していった。フィチーノ在世当時は、『ヘルメース文書』こそはモーゼ五書に先立って書かれた世界最初の哲学書であると見なされ、ギリシア哲学とモーゼとの共通の源泉とされた。つまり、異教哲学とキリスト教との融合を正当化する接点として要請されたのが『ヘルメース文書』だったのである。しかし、早くも17世紀初頭に、『ヘルメース文書』はキリスト教の布教以後に書かれた偽書であることが、スイスの文献学者カゾボン(Isaac Casaubon, 1559-1614)によって指摘され、同『文書』の権威は失墜した。その後も一部の錬金術師やオカルティストがこの『文書』を重んじ続けたが、却ってそのために『文書』は怪しげな書物と見なされ、大学に拠る講壇哲学者からは省みられなくなってしまった。しかし『文書』に盛り込まれた思想は、ヘレニズム期の新プラトーン主義哲学と密儀宗教の実態を知る上で重要な手がかりを提供しており、近年、再評価の動きが著しい。フィチーノ自身は『文書』の中の『ポイマンドレース』という本をラテン語訳している。Cf. A. D. Nock, A.-J. Festugière & I. Ramelli (eds.), *Corpus Hermeticum*, Milano: Bompiani, 2005; 荒井献・柴田有訳『ヘルメス文書』, 東京: 朝日出版社, 1980; D. P. Walker, *The Ancient Theology*, Ithaca, N.Y.: Cornell University Press, 1972; S. Gentile, *Marsilio Ficino e il ritorno di Ermete Trismegisto*, Firenze: Centro Di, 1999.

- 10) 『パイドロス』247D5-7, 「正義そのものを見る。節制そのものを見る。智慧そのものを見る (...kathorai men autên dikaiosynên, kathorai de sôphrosynên, kathorai de epistêmên...)」。フィチーノの引用とは違い、原典に「調和」を見るとは書かれていない。

- 11) 『パイドロス』247E4-6, 「馭者は馬どもの待ち構える秣桶に向かつて神饌を投げ込んでやり, さらにその桶へ神酒を与えて飲ませる (ho hêniochos pros tèn phatnên tús hippús stêsas parebalen ambrosian te kai ep' autêi nektar epotisen)」。ここでフィチーノは, 神饌を「神の完璧な認識」, 神酒を「歓び」とする象徴的解釈に踏み込んでおり, 原典から少し逸脱している。この書簡と同年の自著『快樂論 (De voluptate, 1457)』でも, 「まさしく, ^{アンブrosiア}神饌とか^{ネクタル}神酒とか, プラトーンが『パイドロス』においてそれらの名前で呼んでいるものとは, 実のところ観照する魂のことなのである」(Op. 987)と述べ, 魂自体とさえ同一視している。
- 12) 『国家』621A4-B1, 「いまや夕刻となり, 彼らは失念 ^{アメレトス}川の畔に野営を張る。[・・・]そして全ての者が一定量の川水を飲む決まりであるが, [・・・]飲むと, 汎ゆることを永久に忘れ果てる (skênasthai ûn sphas êdê hesperas gignomenês para ton Amelêta potamon, ... metron men ûn ti tû hydatos pasin anankaion einai piein, ...ton de aei pionta pantôn epilanthanesthai)」。
- 13) 正義と智慧の両翼によって飛翔するという記述はプラトーンには見当たらない。次註にも述べるとおり, 社会的慣習への従順から生じる通俗道徳としての正義を, プラトーンは智慧よりも低く見ている。それゆえプラトーンの原典を厳密に読むなら, 両徳が対等に両翼を成すとは考えられない。また, 哲学の観照的部分が実践的部分を「凌駕する」というフィチーノ自身の記述にも矛盾する。
- 14) 『パイドーン』82A-D。ただし, ここでのソークラテースの論調は実践道徳を卑しめており, 決して全面的に賛同してはいない。社会集団の掟に従順だった者は死後に蜂や蟻へと生れ変わることが出来るが, 神々の仲間入りを果たせるのは観照をこととする哲学者だけであるというのが当該箇所^{の趣旨}だからである (この箇所は『パイドロス』248C-Eの「アドラスティアの定め」にも照応している)。したがってプラトーンにおける二つの徳の比重は観照の側に偏っていると見るべきで, フィチーノが解釈するように対等ではない。このずれは, ルネサンス期における, 実践道徳 (社会的慣習への従順) の必要性への知識人たちの開眼を示唆するのかもしれない。
- 15) 『パイドロス』249C4-5, 「唯だ^お哲学者の知性のみが翼生う (monê

pterûtai hê tû philosophû dianôia)」。

- 16) 実践的にせよ観照的にせよ、ともかく人間の側の努力であるところの哲学に対して、「しかし…」以下では神による「牽引」(被昇天)を説く。したがって両説は、‘ autem ’ という逆接の接続詞によって、鋭く対置されていると見るべきであろう。これは、より大きな枠組みに還元するなら、主知主義と神秘主義との対立である。同様の対置はこの書簡の末尾にも再び現れるが、フィチーノは神秘主義の側に自らを置く。
- 17) ロレンツォ・ヴァラの尽力にも拘らず、「ディオニューシオス・アレオパギテース」を名乗った作家が実は6世紀頃のシリアの隠者であったことは、フィチーノ在世当時ですら未だ一般には認知されていなかった。それゆえフィチーノも、この人物を、キリスト教に改宗した最初のギリシア人と同一視している。ちなみに中世には、パリ市の守護聖人たる聖ドニも、しばしばこの人物と混同された。
- 18) ロマ書1 20, 「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます」(新共同訳)；偽ディオニューシオス『神名論』 . vi. 25, 「そしてともかくも、かれら[預言者たち]は、そのお方[神]が諸々の知性の中にも、諸々の魂の中にも、諸々の肉体の中にも、天にも、地にもましますと言う(Kai ge kai en nûis auton einai phasi, kai en psychais kai en sômasi kai en ûranôi kai en gêi)」。
- 19) 『パイドロス』250D4-6, 「智慧はそれ[視覚]によっては見えない。なぜなら、もしも何か[美の場合と]同様な智慧の明瞭な似像が視覚に向かって矢を放つなら、恐ろしいほど劇的な愛を放つことになろうから(hêi phronêsis ûch hortai deinûs gar an pareichen erôtas, ei ti toîuton heautês enarges eidôlon pareicheto eis opsîn ion)」。「劇烈」であるといけないのは、イデアを直視すると盲目になってしまうからである(『パイドーン』99D-E；『国家』515E-518B；『法律』897D-E 参照)。
- 20) これと同じ文句を、フィチーノは『饗宴註解』 . viii でもプラトンの言として引用しているが、このような文句はプラトンの現存著作のどこにも見当たらない。
- 21) ここでフィチーノが念頭に置いているのは、「エピクーロス派の徒

ら」というよりはルクレーティウス一人のようである。「原子 (corpusculum)」という語も、ルクレーティウスがその『自然論』において用いた術語であった。愛は性交という「労役」にすぎないとする説はこの厭世詩人に固有の考えで、「加ふるに、かれら生気をむなくして労役に滅び、ノ相手の云ひなりに一生を過ぐす (Adde quod absumunt viris pereuntque labore,/ adde quod alterius sub nutu degitur aetas)」(『自然論』 . 1121-22)の一句に顕著である。

- 22) ウェルギリウス『アエネーイス』 . 733-4,「[. . .] かつはまたかれら光をえ目守らずノ闇の牢獄ひとやと翳の檻倉をりにて (...neque auras dispiciunt/ clausae tenebris et carcere caeco)。」
- 23) 先立つ箇所に言われた「対を成す狂気の種」のうち、ここまでは視覚を通じて起る美の種の狂気について論じたので、ここからは聴覚を通じて起る調和の種の狂気について論じる。ただし感性的認識の様態に基くこの区分はフィチーノ独自の解釈で、プラトーン自身は「美の狂気」や「調和の狂気」といった分け方はしていないうえ、対を成すとも言っていない。註37参照。
- 24) 原語は 'musicus' である。ここでは職業演奏家ではなく、歌ったり奏でたりする人一般を指している。なお「俗衆の (vulgaris)」は「天上的 (celestis)」の対義語として定着しており、地上世界に生きる野卑低俗な大衆に関連することを意味する。訳語に採った「伶」も「こざかしい」、「うるさい」が原義で、期せずしてフィチーノの見解と一致する。ここには、可聴的音楽よりも精神の調和状態という「音楽」のほうを重視するフィチーノの態度が、鮮明に表れている。
- 25) 「計算感覚」と訳した原語は 'rationis sensus' であるが、この 'ratio' は脚韻やリズムを数える能力という程度の意味にすぎず、殊更に「理性」と訳す必要はあるまい。逆に「理性」と訳すと、'rationis sensus' は訳語の上で「理性の感覚」なる形容矛盾を犯す。
- 26) ここで詩作が奏楽よりも優位に置かれるのは、おそらく『国家』398 D8-9,「そしてさらに、音階とリズムは歌詞に従わねばならない (dein...Kai mên tèn ge harmonian kai rythmon akolúthein dei tòi logôî)」に基くのであろう。『法律』669E-670A でも、歌詞を伴わない器楽だけの演奏が非難される。

- 27) デルポイはアポッローンの神域があったギリシアの土地。ここに奉仕する巫女が神がかりとなって神託を語り、それを解釈官がギリシア語に翻訳して人々に伝えたことは、ヘーロドトス『歴史』その他によって知られるとおりである。フィチーノがこれに言及するのは、予言の狂気と詩歌の狂気との接点をここで確保しておくためであろう。
- 28) 註5 参照。
- 29) 『国家』616C-617D。
- 30) フィチーノのこの書き方では、「或るプラトーン派の徒」がセイレーンの語源（原義）だけを説明していたかのように読めてしまうが、実は、この辺りの箇所はまるごとマクロビウス『「スキープオーの夢」註解』 . iii の一部を引き写したものである。すなわち ‘Hinc Plato in Re publica sua cum de sphaeratum caelestium volubilitate tractaret, singulas ait Sirenas singulis orbibus insidere significans sphaerarum motu cantum numinibus exhiberi. Nam Siren dea canens Graeco intellectu valet. Theologi quoque novem Musas octo sphaerarum musicos cantus et unam maximam concinentiam quae confit ex omnibus esse voluerunt’マクロビウスの研究者 W. H. スタールは、ここに謂う ‘Theologi’ とその著作として、スミュルナのテオーン『プラトーンの読解における数理的効用について』146-7、ブルータルコス『「ティーマイオス」における魂の創造について』xxxii、ポルピュリオス『ピュータゴラスの生涯』 xxxi、プロクロス『ティーマイオス註解』（Diehl 編纂版）203E を挙げている。なぜ円環軌道の上に坐しているのがムーサではなくセイレーンなのかという点は、ブルータルコスが疑問を呈して以来（『モラリア』745C-F）、古代のプラトーン研究者の間で考究的であった。マクロビウス（とフィチーノ）は語源詮索によって一つの回答を示したと言える。ただし、マクロビウスがセイレーンの原義を「女神によって歌うこと（*dea canens*）」とし、この女神がアナンケーかムーサのいずれかを指すであろうことは容易に予想されるのに対し、フィチーノは「神によって歌うこと（*deo canens*）」としている。この男性単数名詞の神が如何なる存在であるのかは、蓋し一考を要するであろう。もとのギリシア語は ‘*theia eirein*’ で、これが訛って ‘*seia eirein*’ とな

り、さらに‘Seirên’と一語化する。Cf. S. de Rachewiltz, *De Sirenibus*, New York: Garland Publishing, 1987, pp. 145-160.

- 31) ウェルギリウス『アエネーイス』 . 724-7. ただしフィチーノは適宜中略し, ‘*celum ac terras camposque liquentes/lucentemque globum lune Titaniaque astra/intus alit totamque infusus per artus/agitat molem et magno se corpore miscet*’ としている。ここでフィチーノが言わんとするのは、天・地・海・月・星々を包含する世界(宇宙)全体がユーピテルの肉体であり、ユーピテル自身は世界靈魂であるということ。世界靈魂については『ピレーボス』30A-D; 『ティーマイオス』30B-Cを参照。
- 32) ウェルギリウス『牧歌』 . 60, ‘*Ab Iove principium Muse, Iovis omnia plena...*’
- 33) Alexandrus Milesius Polyhistor (fl.c.80-50 B.C.) は、ギリシア・ローマ・ユダヤの歴史に通じ、詩歌、文法、哲学なかんづくピュータゴラス派の教説にも詳しくあった碩学。「ポリュヒストール」の綽名はその学識による。古来、歴史家として高く評価されており、彼をピュータゴラス派の哲学者とするフィチーノの紹介は異例である。
- 34) オルベウス断片 Kern21a, 「ゼウスは最初に生れ給ひ、ゼウスは輝かしくも最後に生れ給ふ。/ゼウスは頭領なり、ゼウスは中庸なり。ものみなゼウスより造られて在り。/ゼウスは地の礎にして天の星明かり。/ゼウスは手力男に生れ給ひ、ゼウスは不滅の手弱女となられ給ふ。/ゼウスは萬象の靈、ゼウスは尽きせぬほむらの焚き荒み。/ゼウスはわたつみの根源。ゼウスは太陽にして月。/ゼウスは王、輝かしくも來臨し給ふ元首。/萬象を覆ふ光は、沈思せる聖なる御心より、/歡喜のうちへと再び戻り給ふが故に。(Zeus prôtos geneto, Zeus hystatos argikeraunos :/Zeus kephalê, Zeus messa : Dios d'ek panta teleitai :/Zeus pythmên gaiês te kai úranû asteroentos :/Zeus arsên geneto, Zeus ambrotos epleto nymphê :/Zeus pnoiê pantôn, Zeus akamatû pyros hormê./Zeus pontû riza : Zeus hêlios êde selênê :/Zeus basileus, Zeus archos hapantôn argikeraunos :/pantas gar krypsas authis phaos es polygêthes/ex hierês kradiês anenekato, mermera rezôn)」(偽アリストテレース

『宇宙論』 vii)。大意は、ゼウスが最初にして最後のもの即ち世界を貫徹するものであり、天・地・海・太陽・月などを含む全宇宙の創造主であると同時に宇宙自体でもあること、それゆえ男でもあり女でもあるというような低次元の矛盾は包括されし揚されること、ゼウスが生物に生氣(魂)を与える火であり、全宇宙の支配者であること、ゼウスを太陽に見立てる場合は、没出の周期運動を、思いに沈んだ状態と喜んでる状態との繰り返しと考えることなどである。フィチーノのラテン語訳はおおむね原文どおりであるが、「ユーピテルは萬象の靈にしてうつし身(Iuppiter spiritus speciesque omnium)」という箇所では、原文に無い下線部を付け加えている。ただの一語にすぎぬとは言え、事物の可感的な現象形態のなかにも神の臨在を認めようとするフィチーノの思想が仄見える。

- 35) ルーカーヌス『内乱記』 . 580, 'Iuppiter est quodcumque uides, quodcumque moueris'.
- 36) この手紙が書かれた時点(1457年)で、未だフィチーノは感性的愛(「俗衆の愛」)を卑しめるのみであるが、後年の『饗宴註解』(1469年)では、「俗衆の愛」にも、可感的世界に降下してきた神的美を感性的に認識するという積極的意義を認めている。田中佳佑「観照からノへと導かれる感性的認識 フィチーノの vulgaris Venus について」,『美学・若手研究者フォーラム報告書』,慶應義塾大学文学部美学美術史学研究室,2006年,114-118頁を参照のこと。
- 37) 『パイドロス』265B3-5,「予言の神がかりをアポッローンに、密儀をディオニューソスに、詩歌をムーサイに、第四の狂気をアプロディーテーとエロースに配したが,[第四の]恋慕の狂気こそ最良のものであるとわれわれは言ったのだった(mantikên men epipnoian Apollônos thentes, Dionysû de telestikên, Mûsôn d'au poiêtikên, tetartên de Aphroditês kai Erôtos, erôtikên manian ephêsamen te aristên einai...)」。